

湖南の扇

芥川龍之介

青空文庫

広東^{かんとう}に生れた孫逸仙^{そんいつせん}等を除けば、目ぼしい支那の革命家は、
 黄興^{こうこう}、蔡鍔^{さいがく}、宋教仁^{そうきやうじん}等はいずれも湖南^{こなん}に生れている。
 これは勿論^{もちろん}曾國藩^{そうこくはん}や張之洞^{ちやうしどう}の感化にもよったのであろう。
 しかしその感化を説明する為にはやはり湖南の民自身の負けぬ氣
 の強いことも考えなければならぬ。僕は湖南へ旅行した時、偶然
 ちよつと小説^{しやうせつ}じみた下の小事件に遭遇した。この小事件もことに
 よると、情熱に富んだ湖南の民の面目を示すことになるのかも知
 れない。……………

*
 *
 *
 *
 *

大正十年五月十六日の午後四時頃、僕に乗っていた沅江丸は

長沙ちようさの棧橋へ横着けになった。

僕はその何分か前に甲板の欄干らんかんへ凭りかかったまま、だんだ

ん左舷さげんへ迫つて来る湖南の府城を眺めていた。高い曇天の山の前

に白壁や瓦屋根かわらやねを積み上げた長沙は予想以上に見すばらしかつ

た。殊に狭苦しい埠頭ふとうのあたりは新しい赤煉瓦あかれんがの西洋家屋や葉

柳やなぎなども見えるだけに殆ど飯田河岸ほとん いいだがしと変らなかつた。僕は当時

長江ちようこうに沿うた大抵の都会に幻滅していたから、長沙にも勿論

豚の外に見るものないことを覚悟していた。しかしこう言う見

すばらしさはやはり僕には失望に近い感情を与えたのに違いなか

った。

沅江丸は運命に従うようにじりじり棧橋へ近づいて行つた。同時に又蒼いあお湘江しょうこうの水もじりじり幅を縮めて行つた。すると薄汚い支那人が一人、提籃ていらんか何かをぶら下げたなり、突然僕の下からひらりと棧橋へ飛び移つた。それは實際人間よりも、蝗いなごに近い早業だつた。が、あつと思ううちに今度は天秤棒てんびんぼうを横たえたのが見事に又水を跳り越えた。続いて二人、五人、八人、――見る見る僕の目の下はのべつに棧橋へ飛び移る無数の支那人に埋うずまつてしまった。と思うと船はいつの間にかもう赤煉瓦の西洋家屋や葉柳などの並んだ前にどつしりと横着けに聳そびえていた。

僕はやつと欄干を離れ、同じ「社」のBさんを物色し出した。

長沙に六年もいるBさんはきょうも特に沅江丸へ出迎いに来てくれる筈^{はず}になつていた。が、Bさんらしい姿は容易に僕には見つからなかった。のみならず舷梯^{げんてい}を上下するのは老若の支那人ばかりだった。彼等は互に押し合いへし合い、口々に何か騒いでいた。殊に一人の老紳士などは舷梯を下りざまにふり返りながら、後^{うしろ}にいる苦力^{クウリイ}を擲^{なぐ}つたりしていた。それは長江^{さかのぼ}を遡つて来た僕には決して珍しい見ものではなかった。けれども亦格別見慣れたことを長江に感謝したい見ものでもなかった。

僕はだんだん苛^{いらだ}立たしさを感じ、もう一度欄干によりかかりながら、やはり人波の去来する埠頭の前後を眺めまわした。そこには肝腎のBさんは勿論、日本人は一人も見当らなかった。しかし

僕は棧橋の向うに、——枝のつまつた葉柳の下に一人の支那美人を発見した。彼女は水色の夏衣裳なつしやうの胸にメダルか何かをぶら下げた、如何にも子供らしい女だった。僕の目は或はそれだけでも彼女に惹ひかれたかも知れなかった。が、彼女はその上に高い甲板を見上げたまま、紅の濃い口もとに微笑を浮かべ、誰たれかに合い図でもするように半開きの扇をかざしていた。……

「おい、君。」

僕は驚いてふり返った。僕の後ろにはいつの間にか鼠色ねずみいろのタアタアクアル大掛児タアを着た支那人が一人、顔中に愛嬌あいきようを漲みなぎらせていた。僕はちよつとこの支那人の誰であるかがわからなかった。けれども忽たちまち彼の顔に、——就なかんずく中彼の薄い眉毛まゆげに旧友の一人を思い

出した。

「やあ、君か。そうそう、君は湖南の産うまれだったつけね。」

「うん、ここに開業している。」

たんえいねん

譚永年は僕と同期に一高から東大の医科へはいつた留學生中の才人だった。

「きようは誰かの出迎いかい？」

「うん、誰かの、——誰だと思う？」

「僕の出迎えじゃないだろう？」

譚はちよつと口をすぼめ、ひよつとこに近い笑い顔をした。

「ところが君の出迎えなんだよ。Bさんは生憎あいにく五六日前からマラリア熱かかに罹かかっている。」

「じゃBさんに頼まれたんだね？」

「頼まれないでも来るつもりだった。」

僕は彼の昔から愛想の好いのを思い出した。譚は僕等の寄宿舎生活中、誰にも悪感あくかんを与えたことはなかった。若しも又多少でも僕等の間に不評判になっていたとすれば、それはやはり同室だった菊池寛の言ったように余りに誰にもこれと言うほどの悪感を与えていないことだった。…………

「だが君の厄介になるのは気の毒だな。僕は実は宿のこともBさんに任まかせつきりになっているんだが、…………」

「宿は日本人倶楽部くらぶに話してある。半月でも一月でも差支えない

。」

「一月でも？ 常談言っちゃいけない。僕は三晩泊めて貰えりや好いんだ。」

譚は驚いたと言うよりも急に愛嬌のない顔になった。

「たった三晩しか泊らないのか？」

「さあ、土匪どひの斬罪ざんざいか何か見物でも出来りや格別だが、………」

僕はこう答えながら、内心長沙の人譚永年の顔をしかめるのを予想していた。しかし彼はもう一度愛想の好い顔に返ったぎり、少しもこだわらずに返事をした。

「じやもう一週間前に来りや好いのに。あすこに少し空き地が見えるね。——」

それは赤煉瓦の西洋家屋の前、——丁度あの枝のつまった葉柳

のある処に当っていた。が、さつきの支那美人はいつかもうそこには見えなくなっていた。

「あすこでこの間五人ばかり一時に首を斬^きられたんだがね。そら、あの犬の歩いている処で、……………」

「そりや惜しいことをしたな。」

「斬罪だけは日本じや見る訣^{わけ}に行^ゆかない。」

譚は大声に笑った後、ちよつと真面目^{まじめ}になったと思うと、無造作^{わとう}に話頭を一転した。

「じゃそろそろ出かけようか？ 車ももうあすこに待たせてあるんだ。」

* * * *

僕は翌々十八日の午後、折角の譚の勧めに従い、湘江を隔てた
 嶽麓^{がくろく}へ麓山^{ろくざんじ}寺や愛晚亭を見物に出かけた。

僕等に乗せたモオタア・ボオトは在留日本人の「中の島」と呼
 ぶ三角洲^{さんかくす}を左にしながら、二時前後の湘江を走って行つた。か
 らりと晴れ上つた五月の天気は両岸の風景を鮮かにしていた。僕
 等の右に連つた長沙も白壁や瓦屋根の光っているだけにきのうほ
 ど憂鬱^{ゆううつ}には見えなかつた。まして柑類^{かんるい}の木の茂つた、石垣の
 長い三角洲はとどころに小ぢんまりした西洋家屋を覗かせた
 り、その又西洋家屋の間に綱に吊つた洗濯ものを閃かせたり、如

何にも活き活きと横たわっていた。

譚^{たん}は若い船頭に命令を与える必要上、ボオトの艫^{へさき}に陣どつていた。が、命令を与えるよりものべつに僕に話しかけていた。

「あれが日本領事館だ。……このオペラ・グラスを使い給え。……その右にあるのは日清汽船会社。」

僕は葉巻を銜^{くわ}えたまま、舟^{ふね}ばたの外へ片手を下ろし、時々僕の指先に当る湘^{しょうこう}江の水勢を楽しんでいた。譚の言葉は僕の耳に唯^{ただ}一つづりの騒音^{もうろん}だった。しかし彼の指さす通り、兩岸の風景へ目をやるのは勿論僕にも不快ではなかった。

「この三角洲^{さんかくす}は橘洲^{きつしゅう}と言つてね。………」

「ああ、鳶^{とび}が鳴いている。」

「鳶が？……うん、鳶も沢山いる。そら、いつか張ちようけいぎよう繼ぎ堯ようと譚延たんえんがいとの戦争があつた時だね、あの時にや張の部下の死骸しがいがいくつもこの川へ流れて来たもんだ。すると又鳶が一人の死骸へ二羽も三羽も下りて来てね……」

丁度譚のこう言いかけた時、僕等の乗っていたモオタア・ボオトはやはり一艘そうのモオタア・ボオトと五六間隔ててすれ違つた。それは支那服の青年の外にも見事に粧よそおつた支那美人を二三人乗せたボオトだった。僕はこれ等の支那美人よりも寧ろむしそのボオトのおおすべなみ大おにりに浪を越えるのを見守つていた。けれども譚は話半ばに彼等の姿を見るが早いか、殆ど仇にでも遇あつたように倉皇そうこうと僕にオペラ・グラスを渡した。

「あの女を見給え。あの艫へさきすわに坐すわっている女を。」

僕は誰にでも急せつかれると、一層何かとこだわり易い親譲りの片意地を持合せていた。のみならずそのボオトの残した浪はこちらの舟ばたを洗いながら、僕の手をカフスまでずぶ濡ぬれにしていた。

「なぜ？」

「まあ、なぜでも好いから、あの女を見給え。」

「美人かい？」

「ああ、美人だ。美人だ。」

彼等に乗せたモオタア・ボオトはいつかもう十間ほど離れていた。僕はやっと体をねじまげ、オペラ・グラスの度を調節した。

同時に又突然向うのボオトのぐいと後あとずさりをする錯覚を感じた。「あの女」は円い風景の中にちよつと顔を横にしたまま、誰かの話を聞いていると見え、時々微笑を洩もらしていた。顴あごの四角い彼女の顔は唯目の大きいと言う以外に格別美しいとは思われなかった。が、彼女の前髪や薄い黄色の夏衣裳なつししやうの川風に波を打っているのは遠目にも綺麗きれいに違いなかった。

「見えたか？」

「うん、睫毛まつげまで見える。しかしあんまり美人じゃないな。」

僕は何か得意らしい譚ともう一度顔を向い合せた。

「あの女がどうかしたのかい？」

譚はふだんのおしやべりにも似ず、悠々と巻煙草まきたばこに火をつけ

てから、あべこべに僕に問い返した。

「きのう僕はそう言ったね、——あの棧橋の前の空き地で五人ばかり土匪どひの首を斬きったって？」

「うん、それは覚えてる。」

「その仲間の頭目は黄六ころう一と言つてね。——ああ、そいつも斬られたんだ。——これが又右の手には小銃を持ち、左の手にはピストルを持つて一時に二人射殺すと言う、湖南こなんでも評判の悪党だつたんだがね。……」

譚たちまは忽ち黄六一の一生の悪業を話し出した。彼の話は大部分新聞記事の受け売りらしかった。しかし幸い血においの匀よりよりもロマンティックな色彩に富んだものだった。黄の平生密輸入者たちに黄ころう

老爺うやと呼ばれていた話、又湘しょうたん譚たんの或商人あきんどから三千元を強奪した話、又腿ももに弾丸を受けた樊阿七はんあしちと言う副頭目を肩ろりんに蘆林譚たんを泳ぎ越した話、又岳がくしゅう州の或山道に十二人の歩兵を射倒した話、——譚は殆ど黄六一を崇拜しているのかと思う位、熱心にそんなことを話しつづけた。

「何しろ君、そいつは殺人りよじん 人百十七件と言うんだからね。」
 彼は時々話の合い間にこう言う註釈も加えたりした。僕も勿論僕自身に何の損害も受けない限り、決して土匪は嫌いではなかった。が、いずれも大差のない武勇談ばかり聞かせられるのには多少の退屈を感じ出した。

「そこであの女はどうしたんだね？」

譚はやつとにやにやしなから、内心僕の予想したのと余り変らない返事をした。

「あの女は黄の情婦だったんだよ。」

僕は彼の註文通り、驚嘆する訣には行かなかった。けれども浮かない顔をしたまま、葉巻を銜えているのも気の毒だった。

「ふん、土匪も洒落れたもんだね。」

「何、黄などは知れたものさ。何しろ前清の末年ばつねんにいた強盗ごうとう蔡さいなどと言うやつは月収一万元を越していたんだからね。こい

つは上シャンハイ海の租界の外に堂々たる洋館を構えていたもんだ。細

君は勿論、妾めかけまでも、………」

「じゃあの女は芸者か何かかい？」

「うん、玉蘭ぎよくらんと言う芸者でね、あれでも黄の生きていた時には中々幅を利かしていたもんだよ。………」

譚は何か思い出したように少時しばらく口を噤つぐんだまま、薄笑いばかり浮かべていた。が、やがて巻煙草を投げると、真面目まじめにこう言う相談をしかけた。

「嶽麓がくろくには湘南工業学校と言う学校も一つあるんだがね、そいつをまつ先に参観しようじゃないか？」

「うん、見ても差支えない。」

僕は煮え切らない返事をした。それはついきのうの朝、或女学校を参観に出かけ、存外はげ烈しい排日的空氣に不快を感じていた為だった。しかし僕等を乗せたボオトは僕の気もちなどには頓とんちや

着^くせず、「中の島」の鼻を大まわりに不相^{あいかわらず}変^へ晴^はれやかな水の上をまっ直^{すぐ}に嶽麓^{たつふ}へ近づいて行^いつた。……

* * * *

僕はやはり同じ日の晩、或妓館^{ぎかん}の梯子段^{はしごだん}を譚^{だん}と一しよに上^あつて行^いつた。

僕等の通^とつた二階の部屋は中央に据^よえたテエブルは勿論、椅子^{いす}も、唾^{たんつぽ}壺^{つぼ}も、衣裳^{いしょう}筆^{ふで}筒^{つつ}も、上海や漢口^{かんこう}の妓館^{ぎかん}にあるのと殆^{ほとん}ど変^へりは見^みえなかつた。が、この部屋の天井の隅には針金細工の鳥籠^{とりかご}が一つ、硝子^{がらす}窓^{まど}の側にぶら下^さげてあつた。その又籠^{またかご}の中

には栗鼠^{りす}が二匹、全然何の音も立てずに止まり木を上ったり下つたりしていた。それは窓や戸口に下げた、赤い更紗^{さらさ}の布と一しよに珍しい見ものに違いなかった。しかし少くとも僕の目には気味の悪い見ものにも違いなかった。

この部屋に僕等を迎えたのは小肥^{こぶと}りに肥った鵝婦^{ポオブウ}だった。譚

は彼女を見るが早いか、雄弁に何か話し出した。彼女も愛^{あい}嬌^{きよう}

そのもののように滑かに彼と応対していた。が、彼等の話してい

る言葉は一言も僕にはわからなかった。（これは勿論僕自身の支

那語に通じていない為である。しかし元来長沙^{ちやうさ}の言葉は北京官

話に通じている耳にも決して容易にはわからないらしい。）

譚は鵝婦と話した後^{のち}、大きい紅木^{こうぼく}のテエブルへ僕と差向いに

腰を下ろした。それから彼女の運んで来た活版刷の局票の上へ芸者の名前を書きはじめた。ちようしょうが張湘娥、おうこううん王巧雲、がんほう含芳、すいぎ酔玉楼、あいえんえん愛媛々、——それ等はいずれも旅行者の僕には支那小説の女主人公にふさわしい名前ばかりだった。

「玉蘭も呼ぼうか？」

僕は返事をしたいにしろ、あいにく生憎鴛婦の火を擦ってくれる巻煙草の一本を吸いつけていた。が、譚はテエブル越しにちよつと僕の顔を見たぎり、無頓着に筆を揮つたらしかった。ふる

そこへ潤達かつたつにはいつて来たのは細い金縁の眼鏡をかけた、血色の好い円顔の芸者だった。彼女は白いなついいしやう夏衣裳にダイアモンドを幾つも輝かせていた。のみならずテニスか水泳かの選手らしい

体格も具そなえていた。僕はこう言う彼女の姿に美醜や好悪を感じるよりも妙に痛切な矛盾を感じた。彼女は實際この部屋の空氣と、——殊とりかごに鳥籠の中の栗鼠りすとは吊つり合あわな存在に違いなかった。彼女はちよつと目礼おどしたぎり、躍おどるように譚たんの側へ歩み寄つた。しかも彼の隣すわに坐ると、片手を彼の膝ひざの上に置き、宛えん轉てんと何かしやべり出した。譚も、——譚は勿もちろん論得意シイラシイラそうに是了是了などと答えていた。

「これはこの家うちにいる芸者げいしやでね、林大嬌りんたいきようと言う人だよ。」僕は譚にこう言われた時、おのずから彼の長沙ちやうさにも少ない金持の子だったのを思い出した。

それから十分ばかりたった後、僕等はやはり向い合つたまま、

木の子だの鶏だの白菜だのの多い四川料理しせんりようりの晩飯をはじめていた。芸者はもう林大嬌の外にも大勢僕等を取り巻いていた。のみならず彼等の後ろには鳥打帽子などをかぶった男も五六人胡弓こきゆうを構えていた。芸者は時々坐すわったなり、丁度胡弓の音に吊られるように甲高い唄うたをうたい出した。それは僕にも必ずしも全然面白くないものではなかった。しかし僕は京調けいちようの党馬や西皮せいひ調ようの汾河湾ふんかわんよりも僕の左に坐った芸者に遥かに興味を感じていた。

僕の左に坐つたのは僕のおととい沅江丸げんこうまるの上から僅わずかに一瞥いちべつした支那美人だった。彼女は水色の夏衣裳の胸に不相変あいかわらずメダルをぶら下げていた。が、間近に來たのを見ると、たとい病的

な弱々しきはあつても、存外ういういしい処はなかつた。僕は彼女の横顔を見ながら、いつか日かげの土に育つた、小さい球根を考へたりしていた。

「おい、君の隣に坐つてゐるのはね、――」

譚は老^{ラオチュ}酒に赤らんだ顔に人^{ひと}懐こい微笑を浮かべたまま、蝦^{えび}

を盛り上げた皿越しに突然僕へ声をかけた。

「それは含芳と言う人だよ」

僕は譚の顔を見ると、なぜか彼にはおとといのことを打ち明ける心もちを失つてしまつた。

「この人の言葉は綺麗^{きれ}だね。Rの音などは仏蘭西^{フランス}人のようだ。」

「うん、その人は北京^{ペキン}生れだから。」

僕等の話題になったことは含芳自身にもわかつたらしかった。

彼女は現に僕の顔へ時々素早い目をやりながら、早口に譚と問答をし出した。けれども唾おとしに変らない僕はこの時もやはりいつもの通り、唯ただ二人の顔色を見比べているより外はなかった。

「君はいつ長沙へ来たと尋きくからね、おととい来たばかりだと返事をする、その人もおとといは誰たれかの出迎いに埠頭ふとうまで行つたと言っているんだ。」

譚はこう言う通訳をした後のち、もう一度含芳へ話しかけた。が、彼女は頬笑ほほえんだきり、子供のようにいやいやをしていた。

「ふん、どうしても白状しない。誰の出迎いに行つたと尋いているんだが。……」

すると突然林大嬌は持っていたまきたばこ巻煙草に含芳を指さし、あざけ嘲る
 ように何か言い放った。含芳は確かにはつとしたと見え、いきな
 り僕の膝を抑えるようにした。しかしやつと微笑したと思うと、
 すぐに又一こと言い返した。僕は勿もちろん論この芝居に、——或はこ
 の芝居のかげになった、存外深いらしい彼等の敵意に好奇心を感
 ぜずにはいられなかった。

「おい、何と言ったんだい？」

「その人は誰の出迎いでもない、お母さんの出迎いに行つたんだ
 と言うんだ。何、今ここにいる先生がね、×××と言う長沙の役
 者の出迎いか何かだろうと言つたもんだから。」（僕は生憎あいにくそ
 の名前だけはノオトにとる訣わけに行かなかつた。）

「お母さん？」

「お母さんと言うのは義理のお母さんだよ。つまりその人だの玉ぎよりよくらん

蘭いえだのを抱えている家の鵠ポオプウ婦のことだね。」

譚は僕の問を片づけると、老酒を一杯あお煽つてから、急に滔とうとう々

チイコチイコ

と弁じ出した。それは僕には這箇這箇の外には一こともわからな
い話だった。が、芸者や鵠婦などの熱心に聞いているだけでも、

何か興味のあることらしかった。のみならず時々僕の顔へ彼等の
目をやる所を見ると、少くとも幾分かは僕自身にも関係を持った
ことらしかった。僕は人目には平然と巻煙草を銜くわえていたものの、
だんだん苛いらだ立たしさを感じはじめた。

「莫迦ばか！ 何を話しているんだ？」

「何、きよう嶽麓^{がくろく}へ出かける途中、玉蘭に遇^あつたことを話しているんだ。それから……」

譚は上^{うわくちびる}脣^なを嘗めながら、前よりも上機嫌につけ加えた。

「それから君は斬罪と言うものを見たがっていることを話しているんだ。」

「何だ、つまらない。」

僕はこう言う説明を聞いても、未^{いま}だに顔を見せない玉蘭は勿論、彼女の友だちの含芳にも格別気の毒とは思わなかった。けれども含芳の顔を見た時、理智的には彼女の心もちを可^{かなり}也はつきりと了解した。彼女は耳環^{みみわ}を震わせながら、テエブルのかげになった膝^{ハシケチ}の上に手巾を結んだり解いたりしていた。

「じゃこれもつまらないか？」

譚は後にいた鴛婦の手から小さい紙包みを一つ受け取り、得々とそれをひろげだした。その又紙の中には煎餅せんべい位大きい、チョコレエトの色に干からびた、妙なものが一枚包んであった。

「何だ、それは？」

「これか？ これは唯のビスケットだがね。……：そら、さつき黄六こうろく一と云う土匪どひの頭目の話をしたろう？ あの黄の首の血をしみこませてあるんだ。これこそ日本じゃ見ることは出来ない。」

「そんなものを又何にするんだ？」

「何にするもんか？ 食うだけだよ。この辺じゃ未だにこれを食べば、無病息災になると思っているんだ。」

譚は晴れ晴れと微笑したまま、丁度この時テエブルを離れた二人の芸者に挨拶した。が、含芳の立ちかかるのを見ると、殆ど憐みを乞うように何か笑ったりしやべったりした。のみならずしまいには片手を挙げ、正面の僕を指さしたりした。含芳はちよつとためらつた後、もう一度やつと微笑を浮かべ、テエブルの前に腰を下した。僕は大きい可愛かつたから、一座の人目に触れないようにそつと彼女の手を握つていてやつた。

「こんな迷信こそ国辱だね。僕などは医者と言う職業上、ずいぶんやかましくも言っているんだが………」

「それは斬罪があるからだけさ。脳味噌の黒焼きなどは日本でも嘸んでいる。」

「まさか。」

「いや、まさかじゃない。僕も嚙んだ。尤も子供のうちだったが。」

「……………」

僕はこう言う話の中に玉蘭の来たのに気づいていた。彼女は鵲婦と立ち話をした後、含芳の隣に腰を下ろした。

譚は玉蘭の来たのを見ると、又僕をそっちのけに彼女に愛嬌をふりまき出した。彼女は外光に眺めるよりも幾分かは美しいのに違いなかった。少くとも彼女の笑う度にエナメルのように齒の光るのは見事だったのに違いなかった。しかし僕はその齒並みにおのずから栗鼠を思い出した。栗鼠は今でも不相変、赤い更紗の布を下げた硝子窓に近い鳥籠の中に二匹とも滑らかに上下し

ていた。

「じゃ一つこれをどうだ？」

譚はビスケットを折って見せた。ビスケットは折り口も同じ色だった。

「莫迦を言え。」

僕は勿論首を振った。譚は大声に笑ってから、今度は隣の林大嬌へビスケットの一片を勧めようとした。林大嬌はちよつと顔をしかめ、斜めに彼の手を押し戻した。彼は同じ常じょうだん談を何人かの芸者と繰り返した。が、そのうちにいつの間にか、やはり愛想の好い顔をしたまま、身動きもしない玉ぎよくらん蘭の前へ褐色の一片を突きつけていた。

僕はちよつとそのビスケットの匂^{にお}いだけ嗅^かいで見たい誘惑を感じた。

「おい、僕にもそれを見せてくれ。」

「うん、こつちにまだ半分ある。」

譚^{たん}は殆^{ほとん}ど左利きのように残りの一片を投げてよこした。僕は小皿や箸^{はし}の間からその一片を拾い上げた。けれども折角拾い上げると、急に嗅いで見る気もなくなつたから、黙つてテエブルの下へ落してしまつた。

すると玉蘭は譚の顔を見つめ、二こと三こと問答をした。それからビスケットを受け取つた後^{のち}、彼女を見守つた一座を相手に早口に何かしやべり出した。

「どうだ、通訳しようか？」

譚はテーブルに頬杖ほおづえをつき、そろそろ呂律ろれつの怪しい舌にこう

僕へ話しかけた。

「うん、通訳してくれ。」

「好いか？ 逐語訳だよ。わたしは喜んでわたしの愛する……………」

黄老爺こうろうやの血を味わいます。……………」

僕は体の震えるのを感じた。それは僕の膝ひざを抑えた含芳がんほうの手

の震えるのだった。

「あなたがたもどうかわたしのように、……………あなたがたの愛す

る人を、……………」

玉蘭は譚の言葉の中うちにいつかも美しい齒にビスケットの一片

を噛^かみはじめていた。……………

* * * *

僕は三泊の予定通り、五月十九日の午後五時頃、前と同じ沅^{げんこ}
 江丸^{うまる}の甲板の欄干^{らんかん}によりかかっていた。白壁や瓦屋根^{かわらやね}を積
 み上げた長沙^{ちやうさ}は何か僕には無気味だった。それは次第に迫つて
 来る暮色の影響に違いなかった。僕は葉巻を銜^{くわ}えたまま、何度も
 あの愛^{あい}嬌^{きやう}の好い譚永年の顔を思い出した。が、譚は何の為か、
 僕の見送りには立たなかった。

沅江丸の長沙を発したのは確か七時か七時半だった。僕は食事

をすませた後、薄暗い船室の電灯の下に僕の滞在費を計算し出した。僕の目の前には扇が一本、二尺に足りない机の外へ桃色の流蘇を垂らしていた。この扇は僕のここへ来る前に誰かの置き忘れて行つたものだつた。僕は鉛筆を動かしながら、時々又譚の顔を思い出した。彼の玉蘭を苦しめた理由ははつきりとは僕にもわからなかつた。しかし僕の滞在費は——僕は未だに覚えてゐる、日本金の換算すると、丁度十二円五十銭だつた。

青空文庫情報

底本：「昭和文学全集 第1巻」小学館

1987（昭和62）年5月1日初版第1刷発行

底本の親本：「芥川龍之介全集 第八巻」岩波書店

1978（昭和53）年3月22日発行

初出：「中央公論 第四十一年第一号」

1926（大正15）年1月1日発行

入力：j.utiya

校正：柳沢成雄

1998年10月20日公開

2016年2月25日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

湖南の扇

芥川龍之介

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>